

## 仮想的有能感の学年による変化

中野 良哉

平成29年度 高知リハビリテーション学院紀要 (平成29年9月) 第19巻1号 別刷

## 報告

## 仮想的有能感の学年による変化

中野 良哉

## Developmental changes in students' assumed - competence

Yoshiya Nakano

## 要 旨

理学療法士を目指す学生の仮想的有能感は学年が上がることにより経時的に変化するのかを明らかにすることを目的とした。学生62名を対象とした。質問紙法にて他者軽視傾向と自尊感情を評価し、同一の対象者の3年間にわたる回答結果が学年を経るごとに異なるかについて分析した。その結果、他者軽視傾向、自尊感情ともに学年による有意差は認められなかった。仮想的有能感4タイプについて学年ごとに分類した結果、分類が変化した学生は全体の72.6%、3年間変化が認められなかった学生は27.4%であった。タイプ変化のうち、最も頻度が高かったのは全能型から自尊型への変化であった。学年別にみると2年時よりも3年時においてタイプ分類が変化する割合が低く、タイプ別にみると仮想型は学年が上がるにつれて他のタイプに変化する割合が低下することが示された。

キーワード：仮想的有能感，縦断的調査，理学療法学科学生

## 【はじめに】

理学療法士養成課程に在籍する学生の多くは、発達段階の上では青年期後期に該当する。青年期特有の心理社会的発達の問題との関連も指摘されている<sup>1)</sup>パーソナリティの発達要因の1つに仮想的有能感がある。これは、「自己の直接的にポジティブな経験に関係なく、他者の能力を批判的に評価・軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚」と定義される<sup>2)</sup>。中野<sup>3)</sup>は理学療法士養成課程に在籍する学生の仮想的有能感と職業的アイデンティティの関連について検討を行った。その結果、仮想的有能感のタイプの一つである仮想型が自尊型よりもアイデンティティの得点が有意に低いことが示された。

木野ら<sup>4)</sup>の調査によれば、仮想的有能感の得点は

青年期前期から中期にかけて有意に高まることが示されているが、理学療法士養成課程に在籍する学生の仮想的有能感が理学療法士養成教育を通して、どのように変化していくかについては明らかになっていない。仮想的有能感は就職活動に対する意欲に間接的にネガティブな影響を持つことが示されていることから<sup>5)</sup>、仮想的有能感の低減は職業意識の発達にとって重要である。しかし、キャリア教育関連の授業を受講しただけでは、仮想的有能感が変化しなかったという報告<sup>6)</sup>もあり、短期間では変化しないことが予想される。そこで本研究では、同一の対象者を3年間にわたって縦断的に調査することによって、仮想的有能感が学内の理学療法士養成教育を通して、どのように変化していくかについて検討した。

## 【方法】

対象学生は、A県内の4年制医療系専門学校に在学中の理学療法学科学生62名（男性38名、女性24名、調査開始時点の平均年齢 $18.2 \pm 0.4$ 歳）とした。留年・中途退学者は調査対象外とした。対象者に研究の主旨・方法、調査結果が成績に影響しないことを口頭、文書にて説明し、同意を得た上で調査を行った。個人情報扱いは十分留意した。

以下に示す心理尺度を含む質問紙による調査を実施した。他者軽視の測定には、Hayamizu et al.<sup>7)</sup>が作成した仮想的有能感尺度 (version 2) を使用した。この尺度は、「自分の周りには気のきかない人が多い」、「他の人の仕事を見ていると、手際が悪いと感じる」など他者軽視傾向を測定する11項目からなる。回答は「全く思わない」から「よく思う」までの5段階で求めた。点数が高ければ他者軽視の傾向が強いと判断した。自尊感情の測定には、Rosenberg<sup>8)</sup>が作成し、山本ら<sup>9)</sup>が翻訳した自尊感情尺度を使用した。「少なくとも人並みには、価値のある人間である」、「色々な良い素質をもっている」など肯定的自己評価を測定する10項目からなる。回答は「全く当てはまらない」から「とてもよく当てはまる」までの5段階で求めた。点数が高ければ自尊感情が強いと判断した。

仮想的有能感尺度と自尊感情尺度を含む質問紙を同一の対象者に対して、1年生時、2年生時、3年生時の計3回にわたって繰り返し実施した。いずれの場合も7月中旬の授業終了後に一斉に配布し、その場で回収した。調査期間は2012年7月から2014年7月であった。

統計処理は、他者軽視の傾向と自尊感情の学年による変化については一元配置分散分析を用いた。また、仮想的有能感の各タイプの頻度の比較にはカイ二乗検定またはFisherの正確検定を用いた。なお、有意水準は5%未満とした。

## 【結果】

仮想的有能感尺度、自尊感情尺度の評定平均値が学年によって異なるかについて分散分析を行った。

その結果、他者軽視傾向、自尊感情ともに学年間に有意な差が認められなかった(表1)。なお、仮想的有能感尺度、自尊感情尺度のCronbachの $\alpha$ 係数はそれぞれ $\alpha = .87 \sim .92$ 、 $\alpha = .75 \sim .84$ であった。

表1. 他者軽視と自尊感情の平均値と標準偏差

n=62	1年生	2年生	3年生	F値	p値
自尊感情	28.11(4.75)	27.89(4.59)	29.47(6.06)	F(2,122)=2.81	0.06
他者軽視	28.27(7.85)	30.08(7.53)	28.44(9.20)	F(2,122)=1.83	0.16

仮想的有能感を持つ個人を抽出するために、速水ら<sup>2,10)</sup>によって他者軽視の傾向と自尊感情との組み合わせによる有能感の類型化が提唱されており、本研究でも各尺度の学年ごとの評定平均値に基づき、4つのタイプに分類し分析を行った。4つのタイプには、他者軽視が低く自尊感情も低い「萎縮型」、他者軽視が低く自尊感情の高い「自尊型」、他者軽視が高く自尊感情が低い「仮想型」、他者軽視と自尊感情がともに高い「全能型」の4類型が含まれる。

各尺度の学年ごとの評定値平均に基づき、4つのタイプに分類し、それぞれのタイプに当てはまる学生の比率が学年により異なるかについてカイ二乗検定を行った結果、有意差は認められなかった(表2)。

表2. 仮想的有能感4タイプの各学年ごとの人数

	1年生		2年生		3年生		$\chi^2$ 値	p値
	n	%	n	%	n	%		
萎縮型	18	29.0	11	17.7	13	21.0	1.86	0.40
仮想型	15	24.2	11	17.7	15	24.2	0.78	0.68
自尊型	12	19.3	16	25.8	18	29.0	1.22	0.54
全能型	17	27.4	24	38.7	16	25.8	2.00	0.37

仮想的有能感4タイプ分類について学年間で分類が変化した学生は全体の72.6%、3年間変化が認められなかった学生は27.4%であった。変化しなかったタイプの内訳は萎縮型、仮想型、全能型がそれぞれ5名、自尊型が2名であった。学年別にみると1年生から2年生進級時よりも2年生から3年生進級時においてタイプ分類が変化する割合が低く、タイ

別にみると仮想型が2年生時よりも3年生時においてタイプ分類が変化する割合が低いことが示された(表3)．1年生から2年生進級時、2年生から3年生進級時におけるタイプ分類変化の内訳については表4に示す．タイプ変化を2、3年生時合計すると最も頻度が高かったのは全能型から自尊型(15名)、最も少なかったのは全能型から萎縮型(1名)、自尊型から仮想型(2名)への変化であった。

表3. 各進級時における仮想的有能感のタイプ変化の有無(人数)

n=62	2年進級時の変化		3年進級時の変化		χ <sup>2</sup> 値	p値
	なし	あり	なし	あり		
萎縮型	7	11	7	4	1.67	0.26
仮想型	5	10	9	2	6.00	0.02 *
自尊型	4	8	8	8	0.78	0.46
全能型	8	9	12	12	0.03	1.00
計	24	38	36	26	4.65	0.03 *

\*p &lt; 0.05, \*\*p &lt; 0.01

表4. 仮想的有能感4タイプの進級に伴う変化の内訳

n=62	1年生→2年生		2年生→3年生		計		
	n	%	n	%			
萎縮型	変化なし	7	38.9	変化なし	7	63.6	14
	萎→仮	4	22.2	萎→仮	1	9.1	5
	萎→自	2	11.1	萎→自	1	9.1	3
	萎→全	5	27.8	萎→全	2	18.2	7
仮想型	変化なし	5	33.3	変化なし	9	81.8	14
	仮→萎	2	13.3	仮→萎	1	9.1	3
	仮→自	3	20.0	仮→自	1	9.1	4
	仮→全	5	33.3	仮→全	0		5
自尊型	変化なし	4	33.3	変化なし	8	50.0	12
	自→萎	2	16.7	自→萎	4	25.0	6
	自→仮	0		自→仮	2	12.5	2
	自→全	6	50.0	自→全	2	12.5	8
全能型	変化なし	8	47.1	変化なし	12	50.0	20
	全→萎	0		全→萎	1	4.2	1
	全→仮	2	11.8	全→仮	3	12.5	5
	全→自	7	41.2	全→自	8	33.3	15

注1) 仮：仮想型，萎：萎縮型，自：自尊型，全：全能型

注2) 人数及びパーセンテージは進級前の各タイプの人数に基づく

## 【考察】

他者軽視傾向と自尊感情が学年によって異なるのかについて検討を行った．その結果、他者軽視傾向、自尊感情ともに学年間に有意な差は認められなかつ

た．吉田ら<sup>11)</sup>は大学1年生を対象として4月、7月、10月、1月の計4回、他者軽視傾向の測定を行ったが、他者軽視傾向が有意に低かったのは4月のみで、それ以降の測定結果間に有意差は認められなかった．また、木野ら<sup>4)</sup>の調査では、仮想的有能感の得点は大学生の時期よりも中学生・高校生の青年期前期から中期にかけて有意に高まることが示されており、本研究の結果をあわせると理学療法士を目指す学生が養成校に在籍している青年期後期の短い期間では変化しにくい特性であることが考えられる．続いて、仮想的有能感の4タイプについて、それぞれのタイプに当てはまる学生の比率が学年により異なるかについて検討した結果、学年間に有意差は認められなかった．このことから特定の学年で特定のタイプの比率が増加あるいは減少するようなことはみられず、各タイプの学年ごとの出現率は比較的安定していることが確認された．

次に、対象者個別の仮想的有能感のタイプ分類に注目し、学年間で分類が変化するののかについて検討を行った．その結果、72.6%の学生は3年間で仮想的有能感のタイプ分類が少なくとも一度変化していることが分かった．タイプ変化を2、3年生時合計すると最も多く見られたのは全能型から自尊型への変化であった．自尊心が高く他者軽視傾向も高い全能型は自尊型と比較して社会貢献志向が低く<sup>3)</sup>、他者との競争を志向する<sup>1)</sup>ため、職業意識の発達とポジティブな関係がみられる自尊型<sup>3)</sup>に変化することは、専門職業養成課程に在籍する学生にとっては望ましい変化といえるだろう．

学年別にみると1年生から2年生進級時よりも2年生から3年生進級時においてタイプ分類が変化する割合が低く、タイプ別にみると仮想型が2年生進級時よりも3年生進級時においてタイプ分類が変化する割合が低いことが示された．今回の結果から仮想型の学生に対して教育的な介入を行うとすれば、比較的低学年の時期に行うことが望ましいと考えられる．仮想型は勤勉性が低いことが指摘されており<sup>12)</sup>、努力はしたくないが他者を軽視することで自己評価は高めたいとする欲求がある．学生の努力

によらず上級学年に進級できたとすれば、勤勉性が低い状態でも望ましい結果を得られるため、より仮定型が維持されやすいと考えられる。試験による成績評価だけではなく、低学年のうちから小テストやレポート課題への取り組みに対するフィードバックを頻繁に行うなどして、普段の取り組みの積み重ねが望ましい結果につながることを認識させる必要があると考えられる。また、仮定型は所属している集団に対する違和感が高く、集団志向的側面に問題を抱えていることが指摘されており<sup>13)</sup>、低学年から学内でのグループ活動を通じた学習経験、同じ目標を持つ友人関係の形成が必要であると考えられる。杉本も<sup>14)</sup>心理的距離が近い学生同士でグループ学習を行うことが他者軽視を生じさせないことに有効であると述べている。

本研究では仮想的有能感の経時的なタイプ分類の変化が示されたが、どのような学内経験を経ることで仮想的有能感のタイプが変化するのかについて今後検討する必要がある。また、今回は対象学年を1年生から3年生までとしたが、長期臨床実習等の体験を通して仮想的有能感がどのように変化するのかについても、今後検討する必要がある。仮想的有能感のタイプ分類について本研究では平均値に基づき上位群と下位群に分類した。中央値を用いた場合でもほぼ同様の分類結果となったが、他の分類方法を用いることによって結果が変わる可能性もある。また、測定上の問題として自尊心尺度の $\alpha$ 係数が低いことが結果に影響した可能性もあり、この点についても今後検討が必要である。

## 文 献

- 1) 伊田勝憲：エリクソンの第IV段階“industry”再考：劣等感と仮想的有能感の関係から。心理学30(1)：31-43, 2009.
- 2) 速水敏彦, 木野和代・他：仮想的有能感の構成概念妥当性の検討。名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学) 51：1-8, 2004.
- 3) 中野良哉：理学療法学科学生の職業的アイデンティティと仮想的有能感。理学療法科学 27(2)：147-150, 2012.
- 4) 木野和代, 速水敏彦・他：仮想的有能感の発達の変化—横断データを用いた検討。日本教育心理学会第46回総会発表論文集：34, 2004.
- 5) 植村善太郎：仮想的有能感が就職活動に対する意欲に影響する過程。日本キャリア教育学会第28回研究大会発表論文集：110-111, 2005.
- 6) 植村善太郎：キャリア教育科目受講前後での勤労観および仮想的有能感の変化。教育実践研究18：213-216, 2010.
- 7) Hayamizu T, Kino K, et al.: Assumed-competence base on undervaluing others as a determinant of emotions. Focusing on anger and sadness. Asia Pacific Education Review 5: 127-135, 2004.
- 8) Rosenberg M: Society and the adolescent self-image. Princeton University Press, Princeton, NJ, 1965.
- 9) 山本真理子, 松井 豊・他：認知された自己の諸側面。教育心理学研究30：64-68, 1982.
- 10) 速水敏彦, 小平英志：仮想的有能感と学習観および動機づけとの関連。パーソナリティ研究14(2)：171-180, 2006.
- 11) 吉田哲也, 伊東明子：常葉大学教育学部新生における自己意識の変化(2)。常葉大学教育学部紀要 36：213-236, 2016.
- 12) 伊田勝憲：仮想的有能感の規定因“assumed-competence”は「見せかけの適格性」か。日本教育心理学会総会発表論文集49：341, 2007.
- 13) 伊田勝憲：教員養成課程学生における学業的自己疎外感と仮想的有能感：教職志望度を考慮した分析の試み。日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集19：105, 2010.
- 14) 杉本英晴, 速水敏彦：大学生における仮想的有能感と就職イメージおよび時間的展望。発達心理学研究 23(2)：224-232, 2012.